



健康プラザ

- 平成19年1月号 -

かんせんせい い ちょうえん おうと げりしょう 感染性胃腸炎—嘔吐・下痢症—

最近、年間を通じて感染性胃腸炎の発生が報告されています。学校や高齢者が生活する福祉施設では集団発生することが多く、とくに抵抗力の衰えた高齢者では重症化して時に死亡するケースもあります。実際に、外来を担当していると秋口から初冬にかけて急激に増加しており、例年の同時期と比べてもかなり多くなっています。11月は全国で2番目に発生件数が多く、今なお県内全域で流行が見られています。年齢別では1歳から5歳の感染報告が多く、その約半数を占めています。例年、12月から1月にかけて最も報告数が増えるため、今後も患者数が増える予測されます。この感染性胃腸炎の原因として「ノロウイルス」が注目されています。

1. 感染性胃腸炎

感染性腸炎は O-157 などの病原性大腸菌や寄生虫のほか、サルモネラなどの細菌、ノロウイルスなどのウイルスによって引き起こされる胃腸疾患の総称で、嘔吐や下痢が主症状です。感染性胃腸炎は一年を通じて発症しますが、一般に細菌によるものは夏場に集中し、ウイルスによるものは毎年秋から冬にかけて流行が認められます。しかしノロウイルスによる感染性胃腸炎が激増し、ウイルスが原因でおこるウイルス性食中毒の9割を占めており、大きな社会問題となっています。

2. ノロウイルスとは

1968年、アメリカのオハイオ州のノーウォーク(Norwalk)の小学校で胃腸炎が集団発生し、患者の便からウイルスが検出され、その土地の名前からそのウイルスはノーウォークウイルス(Norwalk virus)と呼ばれました。その後1972年に電子顕微鏡で観察された際、その形態が小型で球形であったことから、小型球形ウイルス(Small Round Structured Virus: SRSV)のひとつと考えられました。その頃から、このウイルスに似た小型球形ウイルスが次々と発見されましたが、2002年の国際ウイルス学会で急性胃腸炎をおこす非細菌性の小型球形ウイルスを2種類に分類し、「ノロウイルス」、「サポウイルス」と命名しました。ノロウイルスは遺伝子型により、1型、2型に分類されています。これまで食品中に含まれるノロウイルスを培養法で分離同定することは困難でしたが、最近ではウイルスの遺伝子を直接調べるPCR法という方法で同定できるようになりました。

サルモネラなどの細菌性食中毒が発生するためには、少なくとも10万～100万個以上の細菌数が必

要とされていますが、ノロウイルスは感染力が強く、少量のウイルス量(50~100 個)でも胃腸炎の症状が出るのが大きな特徴です。

3. ノロウイルスによる主な症状

ノロウイルスによる感染性胃腸炎は子供から大人まですべての年齢層で発生します。患者の75%は10歳未満の小児ですが、体力のない小児や抵抗力が低下した高齢者では重篤化して死にいたることがあり、その予防が大切です。

ウイルスの潜伏期間は24~48時間で、発熱、嘔吐、下痢(水様性や時に血便など)、腹痛などで風邪と似たような胃腸炎症状をおこします。これらの症状はほとんどの場合、2~3日程度で軽快し後遺症も残しませんが、症状には大きな個人差があり、その重症度もさまざまです。また感染しても症状が出なかったり、軽い風邪症状だけですんでしまうこともあります。症状が回復しても、2~3週間にわたり便中にウイルスが排出され続けますので十分な注意が必要です。

4. ノロウイルスの感染源、感染経路

ノロウイルスは、ほとんどが食べ物や飲み水などを介した経口感染で体内に侵入し、感染性胃腸炎が成立します。一部はペットを介した感染も報告されており、ペットの取り扱いに注意が必要です。

1) 生の貝、とくにカキ、はまぐり、シジミなどの二枚貝と関係しています。

下水や生活排水に流れたウイルスは海に注ぎ、二枚貝が海水中のウイルスを取り込むと貝の中腸ちゅうちようという器官で濃縮されることがわかっています。

2) 調理する人の手などを介して感染します。

3) ウイルスで汚染された水や食品が調理に使われて感染します。

4) 感染性胃腸炎の患者の便や嘔吐物などから直接感染したり、空中に飛散して飛沫感染することが示されています。

5) 学校や老人ホームなどの集団生活が行われる場所で、人から人へ感染します。

5. 治療について

ノロウイルスに効果のある抗ウイルス薬はありません。したがって一般的には対症的な治療(症状に応じた治療)が中心となります。具体的には下痢や嘔吐などで体内から失われた水分や電解質を点滴などで補給し、脱水の改善と電解質バランスの調整を行います。また、吐き気が強い場合には制吐剤(吐き気止め)を点滴内に混入し、食欲の改善をはかり効果的に内服薬を飲むことができるようにして、いち早く全身状態を回復させます。また、乳児や高齢者の場合、病気の進行が急速なことが少なくないので、発熱、下痢、嘔吐などの症状が現れた時には、自己診断で下痢止めなどを内服しないで早めに医療機関を受診してください。病気の発見が遅れたり、2~3日経てば治るなどと、安易に考えたために治療が遅れた場合などに、嘔吐、下痢、発熱などの症状が組み合わさり脱水症が重症化して、生命に

かわることもあります。

6. 予防について

ノロウイルスによる感染性胃腸炎は予防することができます。次のようなことに心がけましょう。

- 1) 日頃から手洗い、うがいを頻繁に行ってください。そして十分な睡眠と栄養を取るようにしましょう。
- 2) 調理や食事の前には手をよく洗いましょう。
- 3) 家庭内や施設内でタオルは共有しないようにしましょう。
- 4) 調理器具やタオルなどは、85℃以上の熱湯で1分以上の過熱が有効です。カキなどの二枚貝を調理する際は、十分に過熱しましょう。
- 5) 下痢などの症状のある人は調理や配食に従事するのはやめましょう。
- 6) 患者の便や吐物にはウイルスが大量に含まれており、乾燥するとウイルスが空中に漂い、これが口に入って感染することもあります。汚物の処理をするときは、使い捨てのマスクと手袋を着用してペーパータオルなどで静かに拭き取ります。汚物が付着した床などは、ハイターなどの塩素系漂白剤を50～100倍にうすめた溶液(塩素濃度0.02%)で浸すように拭き取ります。汚物や処理に使用した雑巾、手袋などは同じように塩素系漂白剤(塩素濃度0.1%)につけてから、ビニール袋などに密封して廃棄します。汚物で汚れた衣類や器具などは、ふた付きバケツなどに入れて持ち運び、塩素系漂白剤(塩素濃度0.1%)につけ置きしてから、洗濯・洗浄します。処理の後は手洗いとうがいを十分に行います。
- 7) 下痢の続く間は浴槽に入らないようにして他の人へ感染させないようにしましょう。また、症状が改善してもしばらくは最後に入浴するのがよいでしょう。入浴の際はお尻に石鹸をつけて、丁寧に洗うように心がけましょう。
- 8) ウイルスが残りやすい便器やドアノブ、電話機、携帯電話、パソコンなども家庭用の塩素系漂白剤を薄めて拭きあげましょう。
- 9) ふとんは日光消毒するのがよいでしょう。

7. 最後に

感染性胃腸炎は誰もがかかる可能性のある病気です。家庭で誰かが感染したら、全員が感染する危険性がありますので予防に心がけましょう。また感染が疑われたら、早めに医療機関を受診しましょう。

医療法人将優会クリニックうしたに
理事長・院長 牛谷義秀